

## 面接法による自我体験の調査方法について

天 谷 祐 子<sup>1)</sup>

### 〈問題と目的〉

児童期後半から思春期にかけて、「自分はなぜ自分なのだろう」と疑問を抱く現象が起こることがある。この現象は自我体験と呼ばれるが、本研究では、この自我体験を面接法によって捉える方法・手順を、今までの天谷(1997a, 1997b, 1997c, 1998c)の調査結果報告を示しながら、明確に提示することを目的としている。また、今までの研究によって得られた知見の中で重要な点や、著者による面接調査の経験も加え、被面接者の報告が自我体験かどうかを判定するための基準を、明確に提示することも目的としている。

### (面接法について)

自我体験に関する言及を行う前に、心理学研究法としての面接法に関する概観をまず行う。面接法は、まだモデル化されていない探索的段階にある対象領域に関して、情報収集や実態調査を行ったり、質的なデータを集めたり、また被験者が防衛的になりがちな内容に関するデータを集めたりするには、有効な手段である(山本・林, 1975)。しかし、その方法論については、大野(1996)が“質的方法の方法論的脆弱さ”を指摘したり、やまだ(1997)が“量的データに関しては統計的手法が精緻化されているので、今後は質的データをどのように活用するかという方法論を開発していかなければならない”と指摘したりしているように、面接法から得られるデータに主に代表される質的データの活用・分析法については、質問紙調査法に主に見られる量的な研究法に比べ、あまり議論がなされていないと思われる。

また、面接法を利用して書かれた研究論文についても、その質的なデータの収集法や、分析(質的な分析、質的データを量的データに変換する手続き)については、その過程が不明もしくは不十分であることが多い。

その結果、執筆者以外の人にとっては、面接法によって得られたデータが、具体的にどのようなものなのか、またどのようにして結果が得られたのか、その全貌を知ることが難しい状況にあると思われる。その理由としては、以下の2点が挙げられる。第1に、質的データ収集の主な方法である面接法は、実施手続きや調査内容が複雑で長い。その結果、紙面の都合により、詳しい内容を論文に掲載できないという場合がある。そういった場合、質的データの収集や分析に関する記述を他の場で示すということが必要となってくるだろう。そして第2には、質的データの収集・分析法に関する技術は、一人一芸のように、研究者個人の特技・好みに依るところが大きいという点が挙げられる。つまり、面接法を主な調査方法として研究を進める場合、それぞれの研究者が独自にデータの収集・分析法を考えて独自に研究を進めている傾向がある。しかし、“個人単位で人間発達を追求して行く時代はそろそろ終るのではないか”と佐藤(1999)も述べているように、共同研究や同じ領域で何人かの研究者が同時に研究を進め、切磋琢磨するといったことが今後必要となってくると思われる。そのためには、質的データ収集の実施方法や分析方法を明確に記述する必要性が出てくると考えられる。

また、面接法の実施に際しての客観性という観点について、石郷岡(1969)は以下の二点を指摘している。第1には、“調査目的に応じた面接者の刺激を常に適合状態におく”という点である。この点については、面接者が被面接者の態度やその場の雰囲気によって柔軟に対応し、被面接者からできるだけありのままの報告を引き出すための技術や方法が要求される。そして第2には、“意味の客観性”、いいかえると“研究者の判断内容が他の研究者から見ても正しいか”という点である。つまり“研究者相互のズレの調整”が必要であり、そのためには、面接者を変えたり、面接場面を録音したテープを後で聞き、不十分な点を補足したりするという方法が要求されるというのである。このような点の客観性の向上には、面接法の実施に際しても、その詳しい方法や技術

1) 名古屋大学大学院教育学研究科教育心理学専攻博士課程後期課程

等をオープンにすることが必要だと思われる。

以上のことから、当該の質的データが、どのような実施の手続きを踏み、どのような実施の技術を使用し、どのような分析の仕方をして得られたものかをより具体的に細かく提示することは重要であろう。そして、それにより、執筆者以外の人が同じような面接調査の実施や、執筆者が採用した方法が妥当であったかという方法論の検討も、可能となってくると考えられる。

### (自我体験について)

さて、自我体験という現象についてであるが、まず、自我体験とはどのようなものかという点を、先に提示しておく。自我体験に関しては、1920年代のドイツの青年心理学者である Spranger (1924/1973) と Buhler (1926/1969) が、青年期初期に起こる質的变化の一つとして、最初の指摘を記述している。Spranger (1924/1973) は、自我体験の定義について直接記述しているわけではないが、Buhler (1926/1969) は、日記や自伝的小説の分析により、自我体験を“思春期に起こる自我の構造的変化の突然の意識化”と説明している。そして日本では、西村 (1978) が、自身の経験的見地から、自我体験を12・3歳頃に起こる、“自分が自分自身であるという、内なる自己との出会いの体験・一種の啓示的体験”と考察している。また高石 (1988) は、西村 (1978) の考察を受け、自我体験を“意識の中心である自我が、無限の時間的、空間的広がりを持った自己という内的世界の全体性の中にはっきりと位置づけられ、自我が自己と新しい結びつきを獲得して、より高次の統合性に向かう原動力となる体験”と定義している。その定義に基づき、高石 (1986) は自我体験尺度を作成し、児童期から青年期を対象に質問紙調査を行っている。しかし、この自我体験尺度は、例えば自然体験因子も含まれ、内容的に自我体験そのものをはかっていると思われるものが多くを占めている。また渡辺 (1999) は自我体験を“それまで自明であった具体的経験的な自己概念に基づく自己理解への違和・懐疑に関わる体験であって、自己についての様々な思索や感情も伴うこともある”と定義し、評定法・自由記述式両者を含めた質問紙調査を行っている。これらの先行研究では、自我体験に関する実証的研究が少なく、その定義に関しても、実証的研究に基づいたさらなる検討が必要だと思われる。

また、以上の先行研究では、自我体験に関して、理論的考察・経験による知見や質問紙調査はいくつか見られるが、面接調査はまだ見られない。自我体験に関する面接調査が必要である理由として、以下の4点が挙げられる。第1に、自我体験に関する実証的研究はまだほとん

ど進んでおらず、研究の探索的段階にあると思われる。よって、面接調査により自我体験を捉え、その体験される実態や背景を調べたり、情報収集をしったりしたうえで、考察・モデル化を進めることが必要である。第2に、自我体験は感覚的体験であり、書き言葉で説明することが困難な場合がある。また自我体験は、自我の奥深い部分をえぐるような体験ともなりえ、“時には自殺や離人体験にもなり得るような危険を伴う (西村, 1978)” 場合もある。よって、面接の相互作用を通して、柔軟に対応しながら自我体験を捉える必要性がある。第3に、面接のやりとりを経るうちに、被面接者が当時の体験をより鮮明に思い出したり、状況を詳しく説明できたりする、という利点が面接法にはある。第4に、自我体験の体験初発年齢は、主に小学校高学年である。自我体験の体験初発年齢前後を対象として調査を行う場合は、書く能力や言語表現能力に影響を受ける可能性が高くなる。よって、面接者が柔軟に対応できる面接法が方法的に望ましくなってくると考えられる。このような各要因により、自我体験に関する面接調査は必要である。

以上から、天谷 (1997a, 1997b, 1997c, 1998c) では、自我体験を面接調査から捉える必要性を感じ、面接法により、ボトムアップ的に自我体験の定義を明確化している。天谷 (1998c) の自我体験に関する面接調査や質問紙調査 (天谷, 1998a, 1998b) から、自我体験の枠組みをある程度定義づけるとすると、以下のようにと思われる。自我体験とは、児童期後半から思春期にかけて、自分という「存在への自問や違和感」が主に見られる現象である。この「存在への自問や違和感」には、具体的に以下の3種の下位側面がみられる。①存在への問い、②起源・場所への問い、③存在への感覚的違和感である (それぞれの下位側面の具体例については、表1を参照)。また、存在への自問や違和感に関して、試行錯誤を繰り返す結果、「自分という存在への意識」に至る場合もあるが、これは自我体験の中心的な体験には位置しない。この、「自分という存在への意識」には、①独自性、②自分の実在の実感の2種の側面が見られる。なお、天谷 (1997c) では、以上のような自我体験の枠組みから、約半数の人に自我体験が体験されているという報告がなされた。

このように、今までの自我体験に関する知見や調査研究などから、自我体験の定義や、理論的な枠組みは明確化されつつある。しかし、自我体験を実際面接法によって捉える方法・手続きそのものについては、具体的に詳しく示されていないのが現状である。よって、自我体験を捉える方法、こういったものを自我体験とみなすかという基準などを、具体的に詳しく示すことを、本研究の

表1 自我体験の下位側面の具体例

- ① 存在への問い： 自分はなぜ自分なのか。  
 自分という存在はいかにして成り立っているのか。  
 自分がこの世に存在するということは、どういうことなのか。  
 → (留意点) 自分という存在(「～としての自分」という様々な属性や関係性から成り立つ自分という文脈ではなく、ただそこにある存在としての自分という文脈である)があるということに対する問い。
- ② 起源・場所への問い： なぜ自分はここに存在しているのか。  
 なぜ自分はこの時代に存在しているのか。  
 自分はどこから来て、どこへ行くのか。  
 → (留意点) 自分という存在についての問いが時間軸や空間軸を考慮に入れて考えられた問い。
- ③ 存在への感覚的違和感： (鏡などで自分を映して、) これは自分であるはずなのに、一体これ(自分)は何なのか。誰か。  
 → (留意点) 自分という存在について、存在している状況・実感のようなものに対して、感覚的に違和感を覚える。

表2 自我体験の質問項目(天谷(1998b)資料より)

	I	II	III	共通性	
<第1因子：存在への問い>					
9. 自分はなぜ自分なのだろう？	.77	.17	.00	.62	
3. 自分は何だろう？	.74	.13	.23	.62	
6. 自分の正体って何だろう？	.73	.14	.36	.68	
4. 自分はだれだろう？	.72	.08	.35	.64	
5. 一体何をもち「自分」としているんだろう？	.68	.12	.28	.56	
8. 自分は本当に自分か？	.63	.34	.08	.52	
10. だれでもなく、どうして自分なのだろう？	.61	.48	.05	.61	
7. 自分の存在そのものが不思議だ。	.46	.44	.29	.50	
<第2因子：起源・場所への問い>					
13. 私が私としてでなく、他のだれかとして生まれたということあっていいのに、どうして私となっているのだろう？	.07	.82	-.01	.67	
14. いろんな人がいるのに、なぜたまたま私なのだろう？	.27	.79	.02	.70	
15. 自分はなぜ他の国や他の時代ではなく、たまたま日本のこの時代に生まれたのか？	.03	.61	.31	.46	
12. なぜ私はこの体をえらんだのか？	.22	.60	.26	.47	
11. 自分が自分であることが不思議だ。	.51	.56	.13	.59	
<第3因子：起源への問い>					
2. 自分はどこへ行くのだろうか？	.20	.17	.86	.82	
1. 自分はどこから来たのだろうか？	.41	.18	.72	.71	
	自乗和	4.227	3.013	1.921	9.161

固有値 1:6.534 2:1.603 3:1.023 4:0.875 5:0.774 6:0.726

目的とする。これにより、自我体験の枠組みをより具体的に示し、自我体験がどのようなものなのか、理解を深めたい。

<方法>

ここでは、面接調査により自我体験を捉える手続きを、時系列に沿って提示する。

① 被面接者の決定

調査の順序は、まず質問紙調査を実施し、その後面接調査を実施する。質問紙は、面接者が同席する状況で実施すると、より丁寧に記入される。また、できるだけ多くの自我体験体験者にアプローチする場合は、質問紙調査を一斉実施した後、自我体験体験者と思われる人に面接を実施することも可能である。しかし、小学校後半か

表3 面接で質問するポイント

＜質問紙で「はい（思ったことがある）」と答えたそれぞれの項目について＞	
ア. 体験したときの年齢	<ul style="list-style-type: none"> <li>・はじめて思ったのはいつか。</li> <li>・どうしてその年齢だと今、思っているのか。</li> </ul>
イ. 体験のきっかけ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自我体験に至るまでの経路－突然ふと思ったのか、何かきっかけがあったのか。</li> <li>・外からの刺激の有無－自我体験に近い内容を、友人、先生、親に言われなかったか。テレビ、本などで、自我体験に近い話題がなかったか。</li> </ul>
ウ. 体験の細かい内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・体験の具体的内容</li> <li>・思ったのは、一人でいたときに限るのか、そうでないのか。               <ul style="list-style-type: none"> <li>→ 体験が起こるメカニズム、パターンを当人なりに何か考えているのか</li> </ul> </li> <li>・体験したときに伴う感情－恐かった、うれしかった、なんとも思わなかった</li> <li>・この体験と同じような、この種の「感覚」に陥ることは、他にはあるかどうか。あるとしたらどういう時か。</li> </ul>
エ. 体験は一回限りかどうか	<ul style="list-style-type: none"> <li>・その体験は一回限りかどうか。</li> <li>・何回もあった場合は、その時々共通した要素があったかどうか。</li> <li>・今はその当時の体験と同じ体験をするかどうか。</li> </ul>
オ. 体験前と体験後の違い	<ul style="list-style-type: none"> <li>・その体験の前と後で何か違いがあったか。</li> <li>・当人にとって、その体験はどのような意味があったか</li> </ul>
カ. リハーサルの有無	<ul style="list-style-type: none"> <li>・今になって、その時の体験を思い出すことがあるかどうか</li> <li>・思い出すのは、当時の感覚とまったく同じか、少しずつ変化・進歩しているのか。</li> <li>・体験の印象深さの程度</li> </ul>
キ. 表面化した行動	<ul style="list-style-type: none"> <li>・体験当時、この体験について誰かに相談したり、話したり、行動に出たり、日記・作文に書いたりなどあったかどうか。</li> <li>・もし誰にも話していない場合、それはどうしてか。</li> <li>・友達とこのような種類のことについて話すことがあるかどうか。</li> </ul>
ク. 当時・現在のパーソナリティ・趣味・興味について（参考資料としての位置づけ）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・一人にいる方がいいときの有無</li> <li>・将来について考えるかどうか</li> <li>・自分の性格について考えることがあるかどうか</li> <li>・いろいろなことを想像したり、考え事をしたりすることが好きかどうか</li> <li>・本を読むのは多い方か、好きか嫌いかで言うとうろか</li> <li>・日記を今までに書いたことはあるかどうか、今書いているかどうか</li> <li>・その他</li> </ul>
ケ. 質問紙で、他に「はい」とつけた項目との関連	

ら中学生を対象とした場合、自由記述の欄への記入を避けるもしくは記述する内容が極端に少ない傾向があるので、一斉実施を行った場合、有効回答が少ない可能性がある。

## ② 質問紙の実施

面接に先立って、自我体験の例を集めた質問紙（表2参照）を被面接者に実施する。この質問紙は、先行文献

における自我体験の例や、大学生への天谷（1997a）の面接調査により得られた自我体験の例を集め、項目作成を行った。また、数回の天谷の調査を経て、その都度改訂を加え、現在15項目となっている。この質問項目の位置づけは、面接調査にスムーズに入るための、刺激としての位置づけである。

なお、表2の因子分析の結果は、天谷（1998b）で、中学生277名に質問紙調査を行った結果である。下位側

面の「存在への感覚的違和感」を直接質問する項目はないけれども、それぞれの項目が感覚的違和感を感じる体験の仕方をするを想定して、このような質問項目群とした。

### ③ 面接の実施

質問紙調査を実施後、被面接者による質問紙の記入結果を基にした面接を実施する。面接内容は、被面接者の了承を得て、テープに録音する。そして、面接で質問するポイントは表3の通りである。面接に際しての重要な留意点としては、以下の5点が挙げられる。まず第1に、自我体験の具体的な内容に関して、体験当時どのような状況で、どのような言葉で体験したのかを、被面接者に直接報告してもらうということである。これによって、自我体験の体験される状況や、その感覚を把握することが可能となってくる。そのためには、面接者が、自我体験の内容に関わる発言や誘導を極力避け、被面接者本人の言葉で語ってもらうことを促すことが必要となってくる。そして第2に、刺激としての位置づけである質問紙の質問項目を、被面接者がどのように解釈したのか、どう思って当該の質問項目に答えたのかを聞くことである。質問紙の質問項目は、内容がかなり曖昧であるので、どのように被面接者に解釈されたのかを把握することによって、分析の際に、報告の内容を理解する助けとなる。さらに、第3に、被面接者の報告をできるだけ具体的に精緻に行ってもらうために、よりくわしい当時の状況や、なぜそのようだったと、現在思っているのかについても客観的な視点で話してもらうような質問をする（例：「今そう思ってるというのは、どうして？」とか、「その時のくわしい状況は覚えている？」という返し方など）ことも重要である。このような質問によって、できるだけ被面接者の記憶の曖昧さの度合いを明らかにすることができるだろう。また、よりくわしい情報を聞き出すことにより、自我体験の体験パターンの背景を理解する助けともなると思われる。第4に、どこまでが一連の体験なのかを、はっきりさせることが重要である。複数の質問項目と同じような内容を、ある一まとまりの体験として体験したのか、またそれぞれ別の体験として体験したのか（被面接者の主観において）について、はっきりさせるということである。これは、分析上大変重要である。被面接者が、一つの体験でどのような思索を行ったのか、その内容や範囲、種類を知ることによって、自我体験がどのような範囲の思索を含んでいるのかを理解する手がかりとなる。つまり、自我体験の定義やその関連要因とも関わってくるのである。第5に、自我体験そのものに関わるような質問以外にも、参考となる背景

等を聞くことが重要となる場合がある。これは、面接場面において、自我体験を体験している人の一定の性格傾向や好のパターン等を面接者が感じ取ることがあるが、そういった場合に、少しくわしく質問するということである。最後に、半構造化面接法に共通して言えることであるが、被面接者が、ある点に関して、最初は記憶が曖昧であったり、思い出せなかったりする場合があるが、話を続けているうちに、もしくは、別の話に移っているうちに、再び思い出すということも、往々にしてある。

### <結果>

ここでは、天谷(1997c)で得られた報告の例を示しながら、面接調査結果の提示の手続きを示す。

#### ④ チェックシートによる分類（調査者と、他1名により）

面接時に録音されたテープを逐語録に起こす。各報告を、被面接者が主観的に一つの体験とみなした体験を一単位として、先の面接で明確にするポイントと、どの下位側面にあてはまるか、自我体験とみなすかどうか、の各観点について、各逐語録から内容を記入する（例；体験初発年齢…小学校5年生（…という発言より）、自我体験の下位側面…①に相当（…という発言により））。被面接者の報告が自我体験かどうかを判断する基準は、表4を参照するが、主に、自分の肩書きや役割行動などを取り払った、ただある存在としての自分について、素朴に疑問や違和感を持つことが条件となる。また、設定した下位側面のいずれか一つ以上にあてはまることを、自我体験とみなす条件とする。表5に、面接データと、その分類結果の例を示す。

#### ⑤ 分類の結果を調査者と他1名が協議

調査者と調査者が十分に説明をしてある他1名が独立に分類を行う。その後、その2者の記入結果を照らし合わせ、協議を行う。分類結果が一致していないものについては、その場で「どうしてそのような分類をしたのか」について話し合い、統一見解とする。その後、それぞれの観点ごとに、2者間の一致率の算出を行う。

#### ⑥ 協議結果を表にまとめる

⑤の協議結果を、各被面接者ごとに表にまとめる。

また、どの程度の割合で自我体験が体験されているのか（自我体験の体験率）についても算出する。

表4 自我体験に含まれる例・含まれない例

(基本的な区別の基準)

自我体験とみなす基本的な基準は、具体的状況に即した自分について考えるということではなく、それまで当然としてこの世にあった自分の存在に、あえて疑いを持ったり、発見したりする意味合いがこめられているかどうかという点である。また、ここで言う「自分の存在」とは、具体的な状況におかれたその時の自分の存在の意味や、自分の具体的な部分(例えば、対人関係における自分、性格特性・行動、役割行動等)という意味ではなく、具体的事象から離れて、個として生きている・連続してある自分・ただそこにある存在という意味である。よって、自分という存在の相対化と、状況依存性からの脱却が望まれる。

以上から、報告の内容が具体的な水準の域を出ていなかったり、ある一つの具体的な状況に即して考えたものであったりした場合、自我体験とはみなさない。例えば、ある日友達から仲間はずれにされ、その時「自分はなんなのか、何がいけないのか、自分の存在なんかなくなればいいんだ」と悲しんだ、などは自我体験に含まれない例である。しかし、仲間はずれにされたとしても、そこから「自分の存在っていうのは、そもそも必然的なものなのだろうか?」という問いに移行した場合は、自我体験とみなす。よって、自我体験とみなす場合、問いの内容が、感情的には中性であり、素朴である。

I. 自我体験に含まれる例

- 基本的に、自分の存在そのものに対する問い。
- 基本的に、自分の存在を相対化できているもの
- 死んだら、「私」という存在はどうなるのか?どこへ行くのだろうか?→起源への問い
- だれでもなくて、なぜ自分は自分なのだろう。→存在への問い
- 自分が自分として生まれたのはなぜだろう。→起源への問い
- 自分はなぜ自分としてここに存在しているのか。→存在への問い、場所への問い
- 自分が生まれて、生きているのが不思議だ。→存在への問い、場所への問い
- 生きているって何だろう、死ぬって何だろう。→起源への問い
- 自分は本当に自分か?→存在への問い
- 手があって、足があって、物体としてある。このからだがあって、意識があるんだなあ。なぜかわからないけど、あるんだなあ。→感覚的違和感、存在への問い
- いろんな人がいるのに、どうしてたまたま私なのか?→存在への問い、起源への問い

II. 自我体験に含まれない例

- 自分の性格や自分の行動についての反省や思考(例:なぜ私はこんな性格なんだろう。)
- 現実的な問題から思考が発展していない場合。状況依存的な思考。
- なんとなく思ったという場合。
- 天国はあるのか?天国はどんなところか?(明らかに自分の存在を疑っていないので)
- 前世は何か?
- 将来に対する不安。この先自分はどうなるのか?自分はどういう大人になるのか?(現実的・具体的であり、自分の存在に対する疑問ではないので)
- わたしはいつ死ぬのか、どのように死ぬのか?
- 本当の自分って何だろう?(存在を明らかに問うているかどうかあいまい)
- なぜ私なんかいるのか?
- 人がうらやましい。
- 自分は何なの?(特になにかいやなことがあった場合。)
- 自分ってなぜこんなだろう?(現在の自分が嫌いな場合。自己嫌悪)
- 自分はどんな人なのか。(自分の存在ではなく、自分のパーソナリティについての探索)
- 捨て子思想
- 何のために生きているのか?(自分の存在そのものがあるということについての疑いがない)
- 他の時代・他の国に生まれたかった。

表5 面接データとその分類結果の例(天谷(1997c)より)

① 中3女子	J4 いろいろ一番最初に思ったか、覚えてる?	J8 で、どんどんいろんなことに発展していったの?
H4 え、結構まえ。小学校くらいかなあ。	H8 うん。	H9 なんか、地球がなんであるとか、自分がなんで動くんだろうとか、自分の体が、そう。なんで体とかが大きくなっていくのかとか、いろいろ。どんどん考えて。
J5 小学校のいろいろかな。前半とか。	H9 なんか、地球がなんであるとか、自分がなんで動くんだろうとか、自分の体が、そう。なんで体とかが大きくなっていくのかとか、いろいろ。どんどん考えて。	-中略-
H5 多分、4年生くらい。結構自分で身の回りをいろいろやりだしたころだから。	J6 なにか、こういうことを考え始めるきっかけみたいなものは何かある?	J16 じゃあ、けっこう、なんで、なんで、って、そういうのばっかりがくる、という感じ?
J6 なにか、こういうことを考え始めるきっかけみたいなものは何かある?	H6 なんだろ。	H16 うん。
H6 なんだろ。	J7 たとえば、そういうテレビを見たとか、本を読んだとか。	J17 それは一人でいる時に思う?
J7 たとえば、そういうテレビを見たとか、本を読んだとか。	H7 違う。ある日、突然なんだなあ。うん。	H17 大体、お母さんとか、うん。が、ご飯を作っていたりする時になんか、となりにいて、なんかしゃべっていたりして、でなんか、そういうことがふいにできて、
H7 違う。ある日、突然なんだなあ。うん。	J8 きっかけもなく。	J18 ですぐ聞く感じ?
J8 きっかけもなく。	H8 ふってなったの。たまに。死ぬってどういうことだろうって。考え出したらもう。	H18 で、なんでおるの、とか、うん。聞いているけど。もうきりがなから、とか。
H8 ふってなったの。たまに。死ぬってどういうことだろうって。考え出したらもう。	-中略-	J19 じゃあ、おかあさんは、あんまりその答えを答えてくれない?
-中略-	H65 2番はね。私が私であることが不思議。何かよく分からんけど、別に私は、私としてじゃなくて、たとえば他の誰かとして生まれてきたりとか、そういうこともありえたのかなあとか、どうして私は私で、こういう顔になって、こういう性格になって、なったんだろうとか、思う時もあるし。最近では思わないけど、あったし。自分自身の存在が不思議になる。たまに。	H19 答えてはくれない。 →〔下位側面-存在への問い・起源への問い(H1より) 表面化した行動-あり(お母さんに話す。H18より)〕
H65 2番はね。私が私であることが不思議。何かよく分からんけど、別に私は、私としてじゃなくて、たとえば他の誰かとして生まれてきたりとか、そういうこともありえたのかなあとか、どうして私は私で、こういう顔になって、こういう性格になって、なったんだろうとか、思う時もあるし。最近では思わないけど、あったし。自分自身の存在が不思議になる。たまに。	J66 あるってことが?	③ 中2男子
J66 あるってことが?	H66 あるってことが。で、またいつか死ぬんだな、とか。そういうふう に考えが進んでいく。	H18 なんか、ひとりでぼーっとしていたら、なんか落ち着かなくなって、なんかからだの中が変になって、で、なんかだんだん恐くなってきたんだけど、その時、来た友達に話したんですよ。来た友達に、なんかからだがどうだこうだあっていて、友達が気をまぎらわすためか知らないけど、なんか違う話を持ち掛けてきてくれて、その話に夢中になっているうちに、なおっていたんですけど。
H66 あるってことが。で、またいつか死ぬんだな、とか。そういうふう に考えが進んでいく。	-中略-	J19 じゃあ、その時に来た友達に、半分その状態のまま友達と会ったというわけだよ。
-中略-	J69 じゃ、さっき、いろんなことにきづいていったという中の、一つ という感じかな?	H19 はい。
J69 じゃ、さっき、いろんなことにきづいていったという中の、一つ という感じかな?	H69 うん。自分自身も不思議だし、自分と違う他人も不思議だし、人間 が不思議かな。うん。	J20 なんか、何いっていたとか、そんなことは特に?
H69 うん。自分自身も不思議だし、自分と違う他人も不思議だし、人間 が不思議かな。うん。	J70 人間があるってことが?	H20 わかんないんですけど、自分が何を言っているのかわからなかったり、??のことに夢中で、しゃべっていたらいいんですけど、
J70 人間があるってことが?	H70 うん。あるってことが。人間がどうやって生まれてきたのか、不思議。	J21 それは、いつもの意識状態と違うと言う感じなのかな?
H70 うん。あるってことが。人間がどうやって生まれてきたのか、不思議。	J71 じゃ、そうやって考えてきたことを、自分の中で、どういう風に意味 付けているか。こういうことを思っ、こんな自分になったとか、 そういうのは何かあるかな。	H21 けっこうそういうような、なんか、顔とか、何かいつもと違うような。と思ったり。
J71 じゃ、そうやって考えてきたことを、自分の中で、どういう風に意味 付けているか。こういうことを思っ、こんな自分になったとか、 そういうのは何かあるかな。	H71 うーん。やっぱ、死ぬことについて、自覚っていうの、ある程度さ、 いつかは絶対死ぬんだから、じぶんがいつか絶対死ぬって言うことが 当たり前なんだから、それを受け入れて、恐くても。それを受け入れ なきゃなって思うし、あと、自分は世界中で私一人しかいないんだから、 うん。すごい、そういう風に思うと、自分が自分であることに誇り を持つし、自分が自分であることを不思議とも思うし、いろいろ自分 に対して疑問も持つけど、いつか自分はなくなるんだから。あ、そ う。だから、なんていうんだろう。自分がいつか絶対死ぬんだって、 言い聞かせてる。言い聞かせてるっていうか、それを受け入れてる。 もう。	J22 じゃあ、そういう感じになった後に、そのことについて何か考えた りとか、そういうことはあった?
H71 うーん。やっぱ、死ぬことについて、自覚っていうの、ある程度さ、 いつかは絶対死ぬんだから、じぶんがいつか絶対死ぬって言うことが 当たり前なんだから、それを受け入れて、恐くても。それを受け入れ なきゃなって思うし、あと、自分は世界中で私一人しかいないんだから、 うん。すごい、そういう風に思うと、自分が自分であることに誇り を持つし、自分が自分であることを不思議とも思うし、いろいろ自分 に対して疑問も持つけど、いつか自分はなくなるんだから。あ、そ う。だから、なんていうんだろう。自分がいつか絶対死ぬんだって、 言い聞かせてる。言い聞かせてるっていうか、それを受け入れてる。 もう。	-中略-	H22 あ、ありましたけど。
-中略-	-中略-	J23 それはどんなことを考えたかな。
-中略-	-中略-	H23 なんか、ここに書いたように、自分がもう1人いるのかなあと思っ たり、なんか自分の中でなんか、動いていてそれがちょっとへんだっ たのかなとか、思ったり、もう一人の自分がいて、とか考えたりとか。
-中略-	-中略-	-中略-
-中略-	-中略-	H26 自分の体の中に。だから、もう一人の人格みたいな。なんか、もう 一人の自分がいるんじゃないかなとか。
-中略-	-中略-	J27 それは、そういう感じになるたびにいろいろ考えたりとかする?
-中略-	-中略-	H27 まあけっこう。その日のうちはけっこう。
-中略-	-中略-	J28 そういうことって、最近でもけっこうあるのかな?
-中略-	-中略-	H28 最近。近くて、3ヶ月くらい前に一回ありましたけど。
-中略-	-中略-	-中略-
-中略-	-中略-	J31 そこからなにか考え始めたりとか、そういうことは何かある?
-中略-	-中略-	H31 そこから考え始めたことは、ここに書いた、自分は何だろう、誰だ ろう、とか、そういうたぐいを、だから、自分の体がなんだか変だと 思っ、そういえばなんで自分はここになんで生まれたんだろうとか。 何で自分はこの家に生まれたんだろうとか、考えました。
② 中2女子	J1 1番は、いろいろから思い始めたのかな。気づいたら思っていた?	
J1 1番は、いろいろから思い始めたのかな。気づいたら思っていた?	H1 なんか、どっからきたんだろうとか、なんでいるんだろうとか、な んか、最初の人間はどこから始まったのかな、とか、なんか、それを 思っていたら、どんどん思っちゃって、なんか。-中略-	
H1 なんか、どっからきたんだろうとか、なんでいるんだろうとか、な んか、最初の人間はどこから始まったのかな、とか、なんか、それを 思っていたら、どんどん思っちゃって、なんか。-中略-	J7 一番最初は「どこから来たんだろう」からはじまったのかな?	
J7 一番最初は「どこから来たんだろう」からはじまったのかな?	H7 多分。まず人が、最初の人はどこから生まれてとか、なんか、神様 とかキリストとか、わかんないから、なんか、そういう感じですよ。	
H7 多分。まず人が、最初の人はどこから生まれてとか、なんか、神様 とかキリストとか、わかんないから、なんか、そういう感じですよ。		

表5 面接データとその分類結果の例(天谷(1997c)より)(続き)

J32	っていうことは、他の「はい」ということを、けっこう考えたと言う感じなのかな?	H40	そうです。なんか、例えば、なんだかよくわからないんだけど、手とか見ている、これは本当に自分の手なんだろうかと、とか、
H32	はい。その考えがあるうちに、ふっとそういうことがあったなと考 えてるうちに、そういえばなんでそんなことがあったんだろう、と思 っているうちに、そういえばなんで自分はこんなんだろう。	J41	じゃ、けっこう自分の体とか、そういうのが本当に自分なのかなと か、そういう感じが多いのかな?
J33	じゃあ、いろいろと、自分のすでにあるこの状況と言うか、そうい うのについて、考え始めたとか、そういう感じなのかな?	H41	うーん。影とか見ても。本当に自分のかけなのかな、とか。 → 下位側面-存在への問い(H2より) 感覚的違和感(H35, H40より) 1回限りかどうか-一回も 表面化した行動-あり(友達に。H3より)
H33	はい。それをきっかけとして。 → 下位側面-存在への問い、起源への問い、感覚的違和感 (H31より) きっかけ-なし(H18より) 表面化した行動-あり(友達に話した。H18より) 体験が1回限りかどうか-一回も	⑤ 中1男子	
④ 中2女子		H32	これは(2番は)、よく考えます。自分はなぜ自分なのか。
J1	4番というのは、どんな風に、いつごろ思ったんだろう?	J33	それはいつごろから思い始めたのかな?
H1	なんか、本当は毎日思っているような気がするんですよね。なんか、 いつごろ、というのわからないくらい。ずーっとずっと前から思っ ているんですけど、	H33	たしか、小4の時から思っていたような。 -中略-
J2	どんな風に思うのかな?	J37	じゃあ、何でもないので、なぜ自分は自分なんだろうって出てきた てこと?
H2	えっ、どうして自分は自分なんだろう。けっこういろんな人にも聞 いたりもしたんですけど、ぜんぜんわかんないとかばっかで、	H37	<u>自分はなぜこの世界に、この場所に存在するのだろう。</u> -中略-
J3	友達とかもやっぱりそういうことを考えているのかな?	H69	まず小学校4年の時にお父さんが、お父さんに、なんかそういうこ とを聞いた覚えが。いま思い出したんですけど。だからなんか、哲学 とかそんなかんじで、言われて。で、そこからなんかしょっちゅう思 うようになったと。かもしれない。
H3	ああ、馬鹿にされるんだよね。そういうことを言うよ。 -中略-	J73	何を父さんに聞いたのかな。 H73 その4番の、 J74 自分はなぜ自分なんだろう、って思ったんだけど、って聞いたの? H74 だから、ぼくはなんでぼくとして、ここに存在しているのって聞い た、かもしれない。 J75 小学校4年生の時にも、そういう言葉で思っていたのかな? H75 俺っていついたかも。 J76 存在とか、そういうのは? H76 存在とかはわかりました。 → 下位側面-存在への問い(H32より) 場所への問い(H37より) 体験初発年齢-小学4年(H33より) 表面化した行動-あり(お父さんに聞いた。H69より)
H9	ぜんぜん結論が出なくて、どうしてだろう、どうしてだろうって。 -中略-	J34	じゃあ10番はどうか。
J34	じゃあ10番はどうか。	H34	これは前から思いますね。なんとなく。
H34	これは前から思いますね。なんとなく。	J35	これは、さっきの4番とはまた違って?
J35	これは、さっきの4番とはまた違って?	H35	うん、そうですね。 <u>自分は何で自分なんだろう、本当に自分なのか。</u> -中略-
H35	うん、そうですね。 <u>自分は何で自分なんだろう、本当に自分なのか。</u> -中略-	J39	これはやっぱり何かをきっかけにというわけでもなく、ふっと出て きたという感じ?
J39	これはやっぱり何かをきっかけにというわけでもなく、ふっと出て きたという感じ?	H39	うーん。なにかきっかけはないんですけど、ふっといきなり出てき た。
H39	うーん。なにかきっかけはないんですけど、ふっといきなり出てき た。	J40	本当に自分なのかなって?
J40	本当に自分なのかなって?		

注) 〃部が自我体験とみなされる箇所。  
Hが被面接者、Jが面接者の発言である。

## ⑦ 分析

⑥における表を利用し、被面接者ごと、または、下位側面ごと、自我体験初発年齢ごと、さまざまなものを独立変数として分析を行う。質的な調査に関する分析法については、大野(1996)や杉村(1998)がその方法の一例を発表しているので参考となる。また、質問紙の自由記述のデータをまとめる方法も参考となると思われる。

## ⑧ その他の注意点

調査によって被面接者から得られた報告は、あくまで報告である。その被面接者が、実際に本当に体験した内容とは必ずしも一致していない。調査当時に、その被面接者が、自分の過去の体験をどのように捉え、意味付け

ているかということ踏まえて、考察を行う必要があるだろう。

## <方法の検討・問題点・今後の課題>

今後の課題としては、面接法によって得られた報告が、自我体験かどうかを判断する境界線をより明確にする必要があるということである。

また、小学生等のより低い年齢集団を対象に、自我体験の面接調査を行った場合、実際自我体験を体験しているであろうと予測されている場合でも、当人の言語能力が未熟なために、自我体験とする基準まで言語能力が到達していない、もしくは言葉でうまく表現できないといった場合、どのように扱うのかという点である。また、劇



的ではないにしろ、「なんとなく」思ったことがあるといったような発言や、徐々に少しずつそういったことを思ったことがあるといった報告の場合、自我体験の範囲に含めるのかという点である。また逆に、自我体験体験時から、かなり年月を経た年齢を対象とした面接調査の場合、明らかに体験した記憶はあるのだけれども、その状況や思った内容があいまい、もしくはその当時のリアルな記憶がないといった場合、どのように扱うのかという点である。現在のところ、不完全であっても、キーとなる現象を被面接者が少しでも語った場合は、自我体験とみなしている。ただ、「なんとなく」思ったという場合や、明らかに思ったことがあるがくわしいことは忘れたという場合は、情報不足として、自我体験を体験していないとみなしている。

#### (方法の検討)

本研究の、自我体験に関する面接調査においては、まず、刺激としての位置づけである質問紙に記入してもらい、それについて、面接調査で詳しい内容を聞くという方法を採用している。しかし、この質問紙の内容以外のものから、自我体験を体験する被面接者が存在する可能性がある。つまり、調査者が把握しているような自我体験しかとらえられないということが起こってくるわけである。現在までのところ、さまざまな質問紙や刺激を元にした面接調査によって、100名を越える被面接者を対象に面接を行ってきたが、著者が把握している以外の自我体験を報告した被面接者は存在しなかった。しかし、他の面接者が同じ被面接者に面接を行った場合、現在把握できている以外の自我体験が引き出される可能性もあるのである。

#### (今後の課題)

自我体験の体験内容やその構造に関する点を、より明確に言語化・モデル化し、提示する必要がある。また、自我体験に関する理論を構築していく必要も出てくる。自我体験はかなり感覚的体験の要素が強いのであるが、自我体験を体験したことがない人にとっても理解可能な説明の仕方をする必要があると思われる。

また、方法的にも、面接における面接者の対応の仕方をより洗練する必要性もある。つまり、より構造化された面接に洗練していく必要がある。より効率よく、そして明確な自我体験をうまく捉えることができれば、自我体験に関する研究もより進むであろう。

#### 参 考 文 献

- 天谷祐子 1997a 「自分」というものへの気づき 教育心理学論集(名古屋大学大学院教育学研究科教育心理学専攻)第26号, 32-36.
- 天谷祐子 1997b 「自分」というものへの気づきはいつ頃なのか? 日本発達心理学会第8回大会発表論文集, 138.
- 天谷祐子 1997c 「自分」というものへの気づき 日本教育心理学会第39回大会発表論文集, 114.
- 天谷祐子 1998a 自分というものへの気づき—質問紙調査による自我体験の体験率と体験初年齢を中心に— 日本発達心理学会第9回大会発表論文集, 303.
- 天谷祐子 1998b 「自分というものへの気づき」現象とその関連要因—中・高校生への質問紙調査から— 日本心理学会第62回大会発表論文集, 265.
- 天谷祐子 1998c 「自分というものへの気づき」現象に関する探索的研究—大学生による自我体験の報告から— 名古屋大学教育学部紀要(心理学科), 45, 75-82.
- Buhler, Ch 1926 Seelenben des Jugendlichen 原田 茂訳 1969 青年の精神生活 共同出版
- 石郷岡泰 1969 面接法(第8章) 北村晴朗・安倍淳吉・黒田正典編 1969 心理学研究法 誠信書房
- 西村洲衛男 1978 思春期の病理—自我体験の考察— 中井久夫・山中康裕編 思春期の精神病理と治療 岩波学術出版社
- 大野久 1996 質的資料(レポート, 面接記録, 伝記)の分析法 日本青年心理学会第4回大会発表論文集, 13-14.
- 佐藤有耕 1999 中学生以上を対象とした研究の動向 教育心理学年報, 38, 64-73.
- Spranger, E 1924 Psychologie des Jugendalters 土井 竹治訳 1973 青年の心理 刀江書店
- 杉村和美 1998 面接法によるデータの収集と分析 日本青年心理学会第6回大会発表論文集, 12-13.
- 高石恭子 1986 自我発達における小学校中学年の位置づけ(2)—自我体験度を通して— 日本教育心理学会第28回大会発表論文集, 372.
- 高石恭子 1988 青年期の自我発達と自我体験について 京都大学教育学部紀要, 34, 210-220.
- 渡辺恒夫・小松栄一 1999 自我体験: 自己意識発達研究の新たな地平 発達心理学研究, 10, 11-22.
- やまだようこ 1997 発達心理学における展開と課題 研究委員会シンポジウム2「単一事例研究の展開と

方法論的課題」話題提供 教育心理学年報, 36,  
12-17

山本輝夫・林英夫 1975 調査的面接法(第3章) 続  
有恒・村上英治 編 1975 心理学研究法 第11巻  
面接 東京大学出版会

(1999年9月16日 受稿)

## ABSTRACT

### An interview-based method for examining “Ego-experience”

AMAYA Yuko

This report describes an interview-based method for examining “Ego-experience.” The definition of “Ego-experience” has been clear from prior studies, but these were based on the clinical experience and the results of questionnaires. Moreover, those studies did not explain in detail the method used to examine “Ego-experience.” This report, which emphasizes the desirability of examining “Ego-experience” through interviews, carefully explains the method used in the author’s study, including the author’s personal experiences of conducting interviews. The report also specifies, with examples, the standard which distinguishes the raw data of “Ego-experience” from the raw data of not “Ego-experience.”

Key words: “Ego-experience,” interview